

「良い子になれない私でも」

「将来、子どもが生活に困らないように育てよう」という願いと、「この子はありのままで十分に尊い」という真実とは、なかなか、どうして両立が難しいものです。幼児教育という働きに携わるようになって、余計に「将来への備え」と「掛け替えのない今」の間にある緊張関係と言いますか、子どもを大切に愛するがゆえの葛藤にぶち当たることがあります。親としての、また幼稚園の職員としての一言一言が、ある時は「将来、困らないために今を律する方向」に傾き、別のある時は「今ありのままを受け止め、ともに喜ぶことが大事」に思えてしまう。まあ、そうやって、時にあっちは傾き、時にこっちを大事にし、という振り子のような揺らぎの連続の中で、ちょうど良い塩梅の関係性、子どもの育ちの環境が整っていく・・・、のだと信じたいですね。子育てにも、保育にも、教育にも「正解」はないので、揺らぎつつ、でも、「子どもの幸せ」を尋ね求めて、ひた向きに学び、反省し、昨日よりもちょっとだけ良くなつた明日に繋げていく。そのゆっくりとした大人の側の成長が、子どもと向き合う時には大事なんだろうな、と思います。言うほど、簡単ではありませんが。理想は難しめに、理念は上向きに設定した方が、きっと上手くいくと、個人的には思っています。

今日の聖書箇所も、神様と人間の関係性が「上向き」になってきたところのお話です。数ある聖書物語の中で、たぶん一二を争うくらいに有名なところでしょうね、ノアの箱舟のお話の、そのクライマックス、の一歩手前の部分です。クライマックスは「虹」ですね。それは、また今度の時に詳しく触れられたらと思います。今日はクライマックスの「虹」の一歩手前の、でも、とても大切なところです。

神様は思い抜いた末に、もうどうしようもなくなった悪辣を極めた人間たちを、人類を、一度、大洪水を起こして滅ぼすと決めた、と言います。この神様の決断を受け取る時に、私たちは、その神様の怒りの酷さを指摘しても良いでしょう。「そこまで怒らなくても」と。しかし、冷静に考えるなら、今なお人類が行っている様々な「しくじり」を思うと、神様を責める前に、自らの言葉と行いを整える方が、より建設的な気もします。戦争、環境破壊、富める者と貧しい者との間にある強欲に基づいた格差、無くならないイジメや差別、これほど情報収集が容易くなったのに、なぜか生じてしまう偏見や誤解。私自身も、そんな世界の構成員であり、もしかしたら、神様の目に悪と映る様々な出来事の加担者なのかも知れない。・・・普段は、ここまで人の罪に触れるような説教はしませんが、今日は、「ノアの箱舟」のお話なので、ちょっと厳しめに御言葉を聞いています。さらに言えば、私たちが着ている服や、持っている携帯端末、特売だからと買った食料品。それらが、どのような経緯で製造され、どれほどの労働者が、その「お買い得」のために動員されているのか。ここまで想像力を広げてみると、先進国を自称する日本に生きる以上、多かれ少なかれ、見たことも無い他国の誰かの血の滲むような労働と生活の上に、今の豊かさを得ています。主の福音を聴く。神様とイエス様の良き報せで癒される。その大前提となる私たちの心持や心境は、神様によって特別に見出されて、生かされる者となれた、ノアさんのようなであれば良いのかな、と思います。善く生きたいと思いながら、社会的に、構造的に、真っ新な無垢の善人であることができない私たち。にも拘わらず、それぞれの人生において、神様から箱舟を与えられ、苦境と後悔を乗り越えて、今を生きている。そのことを自覚して生きている私たち。信仰者。クリスチャン。礼拝を捧げる人。

「ノアは主のために祭壇を築いた」。この大昔にあったであろう風景は、今日の礼拝に確かに繋がっています。悔い改めと感謝。明日を生きる希望と恩返ししたい気持ち。この祈りが、宥めの香り

として神様に届いたら良いなあ、と思って、私たちはここに集まっています。無理強いされてとか、そうしないとダメだからとか、ではなくて、神様とお話しして、イエス様に拝りかかって、自分自身とも向き合って。祈りたい、贊美したい、明日も元気に生きていたい、と願いつつ。そういう人生の歩み方を私たちは選んでいます。

そんな決して、強いとも格好良いとも言えない人生を歩む私たちにとって、私が思うに最高の祝福が 21 節にある神様の御言葉ですね。「人が心に思うことは、幼い時から悪いのだ」と。・・・ここだけ抜き出すと、人類への侮蔑と絶望に聴こえてしまいますが、重要なのは、「人が心に思うことは、幼い時から悪いのだ」「でも、大事にしたいんだ、愛しているんだ」という神様の御心ですね。「わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも寒さも暑さも、夏も冬も、昼も夜も、やむことはない」。当たり前に四季が移ろい、疑うまでもなく朝日が昇り、眠りにつく夜がやってくる、という。

私は、この 21 節を読んで、こんな風に感じました。「キミはすっごく良い子だから、天使みたいに良い子だから。だから、これからもずっと良い子でいてね」と言われるよりも、「何言ってんの、キミは全然悪い子だよ、でも大好きだけどね」って言われる方が嬉しいなって。もちろん、子どもに向かって本当に「キミは悪い子だよ」なんて言いませんけど、ただ、酸いも甘いも知りたくないけど知っちゃった、私たち大人にはね、「悪い子だけど、大好き」って言葉は響くよね、と思うわけです。

そう言われる方が、なんか健全な気持ちで、「じゃあ、頑張るか」って思えるんじゃないでしょうか。確かに、良い子や善人を強制されないから、相応しい振る舞いを身に着けるのに時間はかかるでしょう。「こうあるべき」という正解がないから、戸惑うこともあるかも知れません。でも、間違えても、善人に成り切れなくても、「愛されているんだなあ」と思えるところから始まる、朗ら

かで温かい人間関係、人生の道筋ってありそうな気がします。

そもそも私たちは神様から「悪い子」認定されている、という大前提に立って、「でも、物凄く愛されている」という福音を忘れないでいたいと思います。自分の身近なところでも、世界の広いところでも問題山積、宿題山積みかも知れないけど、自分の限界を弁え、だからこそ、他者にも寛容を示し、でも、理想を諦めず、祈りつつ取り組む信仰者でありたいと思います。ダメダメでも神様に愛されているのだから、存在価値があって生まれてきたのだから。今日も美味しいものを食べて、明日も朝日が昇るのだから。感謝と期待を持って、今週も踏み出して参りましょう。最後にお祈り致します。

神様。今日も、何の功もない私たちを、特別に愛して、特別に見出して、この場に招いてくださり、感謝致します。あなたは、遠い昔に、人類に絶望し、一度滅ぼしたと聖書から学びました。それが真実であるか、どうかを今を生きる私たちが証明する手立てはありません。しかし、少なくとも、大昔に滅ぼされであろう人間たちに勝るとも劣らない不手際を、失敗を、私たちも重ねていると振り返ります。にも拘わらず、私たちを生かし、日々の喜びを与え、愛してくださるあなたに感謝致します。良い子になれない私でも、なおあなたの愛の内に生きて、今日の喜びを享受できる幸せを感謝致します。その祝福を受け取って、今日から始まる1週間も、あなたの道を歩もうとする私たちを、どうかお守り、お導きください。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。